

2007年7月9日

人間科学研究科委員長殿

三芳 康義氏博士学位申請論文審査報告書

三芳 康義氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査してきましたが、2007年7月4日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名 三芳 康義
2. 論文題名 A Study of Zen in American Poets

3. 本文

1) 本論文の構成

本論文(英文)は19世紀および20世紀のアメリカの詩人たちが、表層的なオリエンタリズムを越えて、東洋思想、とりわけ禅の思想を自らの文学的・エコロジカルな着想のなかにどのように取り込んでいったか、逆言すれば、禅思想がアメリカの詩人たちにどのように影響を与えてきたかを、実際の作品や生活を通して考察したものである。

まず、序文において、著者はアメリカの思想家や文学者たちと東洋思想・禅仏教との最初の出会いを、人間が自然を通して神の領域に進むことができるとした19世紀中葉の超絶(超越)主義者たち(transcendentalists)、とくにその創唱者とされる哲学者・詩人のラルフ・W・エマソン(Emerson)と、彼の思想を実践した詩人であり、今日エコロジストの先駆者とも言われるヘンリー・D・ソロー(Thoreau)に求める。やがて彼らの直接的ないし間接的な影響を受けて、L・W・ハベル(Hubbell)やゲーリー・スナイダー(G・Snyder)が、禅と真正面に向き合った詩作を行うようになったとする。

「東洋思想との出会い」(An Encounter with Oriental Thought)と題された第1章では、ピューリタンだったエマソンが、禅思想の原点ともいべきインドの『ヴェーダ』や『バガヴァッド=ギータ』に触れ、この出会いから代表作『ブラフマー(Brahma)』が生まれたという。そして、梵我一如的な世界を扱ったこの作品のうちに、西欧的な合理(=理性)主義と、その根底をなす主体と客体の二元論を越えたメッセージを読みとる。

次いで著者は、エマソンの衣鉢を継ぐソローのエッセイ『ウォルデン(Walden)』やThe

Dial 誌などに掲載された詩を取り上げ、超絶主義者たちの拠点であったニューイングランドのコンコード近郊にあるウォルデン湖畔に小屋を建て、2年間の自給自足的な独居生活のなかで自然を見つめ続け、そこから大いなる知を得たソローのなかに、ヴェーダ思想とのコンコルダンスをみてとる。

ハベルの詩作を対象とした第2章(Gertrude Stein and Lindley William Hubbell)では、まず独特の文体のみならず、パリでのピカソやセザンヌ、さらにキュービストたちとの交友や「失われた世代」の命名者としても知られる、アメリカの女流作家G・スタイン（この作家について、著者は今春上梓された『反復する声音』で詳しく論じている）とハベルとの交流を紹介し、彼女がピカソたちから受けた美学的影響が、のちにハベルの美学にまで及んでいること、つまり、ハベルの詩の世界を知る上で、スタイン文学を知ることの重要性を指摘するのである。

そのハベルは、ニューヨーク市立図書館での仕事を止め、ピューリタニズムの強いハートフォードに生まれながら、anathema（破門）と題した詩を書き、故郷やキリスト教とも決別して1953年（52歳）、来日する。以後、半生を日本で送った彼は、スタインとの出会いや同図書館勤務中に蓄積した現代美術への並々ならぬ知見を有していたが、同志社大学でシェークスピアを講じながら、能と禅寺に表象される禅文化に触れ、その驚きと関心を代表作『セヴンティ・ポエムズ』の詩に投影するようになる。第3章(Lindley William Hubbell's Poetry)はこうしたハベルの詩作における禅の影響を分析している。

第4章(Gery Snyder's Wild Eyes and Dogen's Zen)は本論文の中核ともいうべきもので、ここではアレン・ギンズバーグと並んでビート・ジェネレーションの代表的詩人でもあったスナイダーの著作が取り上げられている。パークレー時代にアメリカ先住民や禅仏教を学んでいた彼は、1956年に初めて来日し、京都の臨済宗大徳寺で雲水としての修行を積むことになる。爾来10年近く禅を実践するが、その過程で道元の『正法眼蔵』に接し、とくにそこに所収されている「現成公案」や「山水経」に感銘する。さらに彼は、禅の語録として有名な北宋時代の『碧巖録』のも、のちに彼の詩的イメージの根幹をなすようになっていく。

著者によれば、彼のこうした禅的志向はじつは初期の詩作にもすでに萌芽的に読みとれ、それだけに道元禅を受け入れる素地ができていたとするが、かつてアメリカのシェラネバダ山麓で独住生活を営み、コヨーテやクーガの野生の眼を通して世界を描き出そうとした経験の有する、そして現在もエコロジー運動を展開している、スナイダーの思想や文学の背景にある「野生」(the Wild)を理解するには、たとえば禅にいう「無為自然(むいじねん)」との霊妙な符合に気づかなければならないとも指摘する。

結論部では、こうした一連の考察を受けて、僧籍(曹洞宗大和尚)に身を置く著者は、禅文化がアメリカの詩人たちにどのように受容されたかを語り、これまでこうした視点からの分析がほとんどなされてこなかったことを指摘する。そして最後に、《もし、アメリカを含む他の文化や文学に禅仏教がさらに広まっていけば、また、禅がアメリカの詩人たち

の新たな知を吸収していけば、この出会いから新しい禅の本格的かつ精力的な形が生まれるだろう》との展望を述べる。

2) 本論文の評価

本論文はエマソンからスナイダーに至るまでのアメリカの詩人や思想家を、東洋思想、とりわけ禅思想との関連で論じたものである。本文にもあるように、アメリカへの本格的な禅の紹介は鈴木大拙をもって嚆矢とする。そして今日、精神文化を訴えるカウンターカルチャーとしての「Zen」が、多少ともブームとなっている。しかし、本論文で取り上げた詩人や思想家たち、とりわけハベルやスナイダーたちは、そうした流れとは一線を画し、かつてエマソンやソローがヴェーダ的叡智をそうしたように、自らのうちに禅を血肉化しているという。そのことを、著者はさまざまな著作と、彼らの翻訳ではない生の言葉を通して丹念に立証している。あえて英文で書かなければならなかった所以がここにある。論述の展開や資料の扱い方も見事である。分量的に大作とは言えないまでも、間違いなく力作に属する。

ところで、面妖なことに、本論文には先行研究に関する記載がほとんどない。博士学位申請論文としてはいささか異例だが、それはしかし著者の怠慢や迂闊さを意味するものではない。すなわち、本論文のような主題を真正面から真摯に取り上げた研究は、わが国はもとより、アメリカにおいても皆無なのである。それが何によるのか、著者は明示していないが（可能であるかどうかはともかく）、おそらくそれは、アメリカ文学研究者にとって禅思想を理解すること、禅研究者にとってアメリカ文学を把握することの困難さに起因するのだろう。そうした意味において、本論文はまさに曹洞僧でありながらアメリカ詩の研究者でもある著者ならではのものであり、ここに本論文の独創性と真骨頂があるといえる。と同時に、「禅と文学」との邂逅を分析した本論文は、単に文学の世界だけでなく、現代思想や宗教学、あるいは文化人類学といった異分野にも、かなりのインパクトと説得力をもって参入していくはずである。

以上のことからして、下記審査委員会は本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに十分な学問的価値を有するものと判断する。

4. 三芳 康義氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	博士（人間科学）早稲田大学	蔵持 不三也
審査員	早稲田大学教授	学術博士（筑波大学）	寒川 恒夫
審査員	早稲田大学教授	Ph.D（UCLA）	森本 豊富

